

伊藤遼(慶應義塾大学)

いわゆる分析哲学の一つの起源が、ムーア (G. E. Moore) とラッセル (Bertrand Russell) による英国観念論反駁の動きにあったことはよく知られている。また、同様によく知られていることは、彼ら自身もまた、こうした動きをはじめ以前には、英国観念論者たち、とりわけ、ブラッドリー (F. H. Bradley) の著作を「熱狂を持って読み、他の近年の哲学者の誰よりも賞賛していた」ことである (Schilpp, 1944, 10)。ムーアやラッセルが当時支持した実在論やその上に彼らが展開した倫理学や論理学を理解するにあたって、英国観念論という思想背景を理解することの重要性は、Hylton (1990) や Griffin (1991) の業績により広く理解されてきたと言えよう。

近年では、一方で、ムーアやラッセルに対して影響を与えたもう一つの思想背景として、彼らが学部時代に師事したスタウト (G. F. Stout) の「経験的心理学 (empirical psychology)」に注目する動きがある。例えば、Preti (2008) は、ムーアの “The Nature of Judgment” (1899) の構成や彼の講義ノートを事細かに調べること、彼がスタウトから受けた影響に対する文献学的証拠を与えようと試みる。また、van der Schaar (2013, 2016) によれば、ムーアが “The Nature of Judgment” において提示する実在論的な判断論は、ブレンターノ (Franz Brentano) やトヴァルドフスキ (Kazimierz Twardowski) の判断論の延長線上に位置付けられる。彼女によれば、ムーアは、スタウトの講義や著作を通して、彼らの判断論を学んだのであり、“The Nature of Judgment” において提示された彼の実在論的な判断論は、これらの判断論の影響のもと生まれたものに他ならない。確かに、同じようにブレンターノ、トヴァルドフスキらの系譜に属する哲学者として数えられるマイニングが、ムーアやその影響を受けたラッセルのそれとよく似た判断論を独立に展開したという事実を踏まえれば、このように、考えることはごく自然である。

とは言え、近年のこうした動きは批判的な仕方でも検討される必要がある。というのも、こうした動きに与する論者は時として、ムーアやラッセルが 1898 年頃から展開した新たな実在論に対して、スタウトの経験論的心理学が与えた影響を過大評価することがあるように思われるからである。ムーアやラッセルに対するスタウトによる影響はおそらく疑い得ない。しかし、例えば、Preti (2008) のように、彼らが提示した実在論的判断論の中心的なテーマが、経験的心理学の考えを発展させることに尽きるものだったと結論することは早計であるように思われる。

本発表では、スタウトによるムーアやラッセルへの影響を正しく見積もる一つの試みとして、彼らの実在論的判断論を特徴づける「概念は思考の可能的な対象である」(Moore 1899, 179) という考えに注目する。彼らは、われわれが判断にもちいる「概念」なるものが、われわれの判断の作用に先んじて、判断の可能的な対象として存在すると考えた。そして、この考えに訴えることで、彼らは、ブラッドリーの判断論を否定した。実際、ブラッドリーの判断論の要点の一つは、われわれが判断に用いる「概念」あるいは「観念 idea」は本質的に「観念的 ideal」なものであって「実在的 real」でないという主張に求められる。ムーアやラッセルは、こうしたブラッドリーの判断論を退けるにあたって、「思考の対象となり得るもの全て」が自存的な存在者、実在であるという考えに

訴える。この意味で、このような考えは、彼らの実在論的な判断論の特徴であると言える。そして、van der Schaar (2016) が指摘するように、トヴァルドフスキやスタウトの著作においても同様の考えがみつけられる。例えば、スタウトは、「われわれがどのような方法でも知覚したり考えたりし得るものは何であれ、われわれがそれを認識する諸過程からは独立した存在と本性を持つ」と述べる (Stout, 1900)。とは言え、こうした事実のみから、van der Schaar のように、ムーアやラッセルの実在論的判断論がスタウトの影響によって形成されたものだと結論することは必ずしも妥当ではないだろう。その理由の一つには、スタウトがそうした考えを明示的に発表したのは、ムーアが “The Nature of Judgment” を刊行した後であるという事実が挙げられる。さらにまた、ムーアは、「思考の対象となり得るもの全て」を実在として認めるという考えを導入するにあたって、この考えを他の哲学者に負うものだと認めることはなく、ラッセルはその考えをムーアによるものだと述べる。もし van der Schaar (2016) の解釈が正しいとすれば、彼らは、それぞれが倫理学と論理学の基礎をなすものとしてもちいた、極めて重要な考えの出自を忘れてしまった、あるいは、隠したことになってしまう。

こうした点を踏まえて、本発表では、ムーアがいかにして「思考の対象となり得るもの全て」を存在者として認めるという着想を得たのかをテキストが許す範囲で明らかにすることを試みる。スタウトによる影響を解く近年の研究に対して、こうした批判的な検討を行うことによって、彼の経験的心理学とムーアやラッセルによる実在論的判断論のあいだの関係を正確に理解するための一つの足がかりを提供することが本発表の目標である。

#### 文献

- Griffin, Nicholas. (1991) *Russell's Idealist Apprenticeship*, Oxford: Oxford University Press.
- Hylton, Peter. (1990) *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy*, Oxford: Clarendon Press.
- Moore, G. E. (1899) “The Nature of Judgment,” *Mind*, 8, 176–193.
- Preti, Consuelo. (2008) “On the Origin of the Contemporary Notion of Propositional Content: Anti-psychologism in Nineteenth-century psychology and G. E. Moore's Early Theory of Judgment,” *Studies in History and Philosophy of Science*, 39, 176–185.
- Van der Schaar, Maria. (2013) *G. F. Stout and the Psychological Origin of Analytic Philosophy*, Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- Van der Schaar, Maria. (2016). “Brentano, Twardowski, and Stout: From Psychology to Ontology,” *Oxford Handbooks Online*. [http://www.oxfordhandbooks.com/view/10.1093/oxfordhb/9780199935314.001.0001/oxfordhb-9780199935314-e-67.]
- Schilpp, P. A. (1944) *The Philosophy of Bertrand Russell*, Evanston, Illinois: The Library of the Living Philosophers, Inc., 1st edition.
- Stout, G. F. (1900) “The Common-sense Conception of a Material Thing,” *Proceedings of Aristotelian Society*, 1 (n.s.), 1–17.